



2012年10月18日

ユング心理学研究会10月セミナー 講師：赤坂佳子

2012 後期テーマ「ユング心理学と深層メッセージ」

テーマ

《死の物語と自己成長～アニマルコミュニケーションを通して～》

人は生と死との連鎖の中で、出会いと別れを体験します。愛するものを失った時、残して逝く時、大きな力になるのは何でしょうか。今回は2009年に私が編集した本『永遠の贈り物』を取り上げました。死を通して再生するような動物の言葉がちりばめられ、学び共感できる場所があると思ったからです。動物が教えてくれる〈全て受け入れる受容性〉〈死を受け入れる力〉などについて、ペットロスや安楽死にも触れてお話ししました。ピアニストの河上素子さんに本の朗読をして頂き、ユング研究家の白田信重さんにユング心理学的観点から本の見方および動物の飼養などの問題も含め、死の物語と自己成長の深層について解説頂きました。メンタルケア心理士の新井宏依さんの精神科におけるペットロス患者のケアの様子もうかがいました。動物は生きている間だけでなく、その死においても私たちに多くのことを教えてくれています。

赤坂佳子



■講師プロフィール 赤坂佳子（編集者） 早稲田大学卒。出版社・編集プロダクションで人や動物のホリスティックな健康本や実用書を中心に編集、執筆。手がけた本は『永遠の贈り物』『ネコとしあわせに暮らすための魔法のなで方』『カラダにやさしい野菜スイーツ』『断る心理テクニック』『古今亭志ん生』他 最近オルゴール研究を始める。

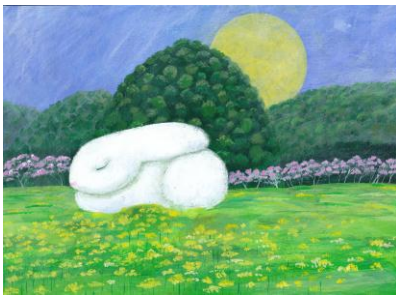
<Contents>

I はじめに 赤坂佳子 25分

- * 自己紹介&ユング研参加のきっかけとなった本『永遠の贈り物』紹介
(死生観を物語として表した本/動物が物語る永遠の命)
- * 監修者紹介/おくだひろこ獣医師の経歴と診療現場で感じた本書の必要性について
- * 著者紹介/ローレン・マッコールの経歴とアニマルコミュニケーターへの道
- * 本執筆の動機、アニマルコミュニケーションとは？

II 『永遠の贈り物』朗読

朗読：河上素子さん（ピアニスト・作曲家・歌手）15分



III 『永遠の贈り物』のユング的解釈および供養を通してみる人間と動物

解説：白田信重さん（ユング研究家）20分

<休憩・インフォメーション> 20分

IV パネルトーク 『永遠の贈り物』および死の物語と自己成長について 30分

- * メンタルケア心理士の新井宏依さんによるレポート
《精神科におけるペットロス患者/ペットロスの高齢男性患者の症状とケア》
- * ペットロス、安楽死問題ほかについて白田、河上、赤坂、新井、トークセッション

《死の物語と自己成長～アニマルコミュニケーションを通して～》

-----発表内容のまとめ-----



<著者ローレン・マッコール紹介>

アメリカオレゴン州在住のイギリス人で、アニマルコミュニケーターとして世界的に名前が知られています。日本では、カリスマ的な存在のようでアニマルコミュニケーションの個人セッション、セミナー、講演会は盛況です。もともと彼女は広告業界で働くビジネスウーマン。その彼女がなぜアニマルコミュニケーターになったか。それは彼女の父親の忘れ形見のマラミュート犬ルーが癌にかかった時、ルーの望むことは何か知って看病したいと思い、アニマルコミュニケーションを学び始めたのが転身するきっかけとなりました。ルーの今回の人生の目的はローレンを彼女の天職であるこの仕事に就かせるためだったそうです。この本に協力したもう一頭の愛犬バーニーズマウンテンドッグのバイロンは、本書執筆中に癌で亡くなっています。

<アニマルコミュニケーションとは？>

アニマルコミュニケーションについて、本当に動物の魂と話しているのか疑問に思われる方も少なくないでしょう、いったい何と話しているのか。

ローレンは、本の中で、

「相手が黙っていても『この人は私のことを好きかも』って感じることもあるでしょ。思いのエネルギーが波動となって伝わる。同じように考えも振動として流れてくる。自分は動物たちの思いや考えを、そのまま感じ取るだけ」と言っています。

「アニマル・コミュニケーションは、いかなる宗教とも関係していないし、超能力や霊能力のような特殊な能力の話ではない。誰でもできるけど、訓練する時間が必要で、訓練には時間がかかる。なぜならアニマル・コミュニケーションは、頭と心をからっぽにしてリラックスするところから始まるが、ほとんどの現代人の頭の中は、日常の雑音が多すぎて、簡単に動物たちの声を聴くことができない」とも言っています。

ローレンは、動物と会話するということを、よくラジオのチューニングに例えます。

「チューナーをお気に入りのラジオ局の周波数に合わせるのと同じように、動物たちが発している『波動』も個々に違うから、話したいその子の周波数に合わせれば通じる」と言

っています。

——そうは言っても、何語で動物は話すか、最初にお会いしたときに質問しました。英語？ 日本語？ それとも……？

「動物と話す時って、実は目の前の肉体と話しているわけじゃなくて、動物たちの想念というか魂みたいなものと会話している。だから、この世にいる動物ともあの世にいる動物とも話すことができる。自分はいろいろな国の言語を話せるわけじゃないけど、動物たちの思いが理解できる言語に変化して伝えられる気がする」

ちなみに、別のアニマルコミュニケーターのやり方は、だいたい同じようですが、脳波を瞑想などでアルファ波にして、動物に意識を集中し自分の潜在意識と動物の潜在意識が交流するイメージを強く持ち、動物と会話するという事です。知人で埼玉でアニマルコミュニケーターやっている女性は、脳波をアルファ波でなくシータ波にしてテレパシーで会話するそうです。

＜監修者おくだひろこ先生紹介＞

獣医師のおくだ先生はローレンとは友人関係です。おくだ先生は横浜鴨居のおくだ動物病院副院長で、西洋医学をベースに漢方鍼灸ホメオパシー、アロマなどを取り入れ動物の心と体をまるごとケアするホリスティックケアを実践され、動物の心の問題にも取り組んでいる方です。先生はペットロスを経験するには、本書が役にたつと思い一日も早い出版に尽力されました。

＜ペットロスと本書の企画意図＞

この本の企画意図のひとつは、ペットロスを軽く最小限にするというものでした。

現在、動物を飼っている人の割合は、2010年のペットフード協会のデータによると犬は世帯数の17.8%、5世帯に1世帯が、猫は10.6%なので9世帯に1世帯が飼っている。これに統計にない小動物を入れればかなりの世帯がペットのいる家庭といえます。ペットブームの背景には核家族化、少子高齢化、一人住まいの増加によりペットが「家族」「友人」とし愛する対象となったことがあげられます。衣食住、医療面でも人間並みとなっています。ペットの擬人化は顕著です。

一方、動物は人間より寿命が短く、犬の平均寿命13.9歳、猫14.4歳です。ほとんどの飼い主は動物の臨終を経験します。

ペットロスとは文字通り、動物を亡くするという事です、動物を亡くして悲しむこと自体は当たり前のことです。一口にペットロスの悲しみといっても、それはただ悲しいというだけでなく後悔や罪悪感、申し訳なさや自責の念に苦しんだり、ひとりぼっちになってしまった孤独感や不安、もう一度会いたい抱っこしたいという思い、そういったものがあります。時には怒りや敵意が出てくることもあるそうです。

それが生活に支障をきたすまでになり長引くとそれは深刻なペットロスとして専門家など

のケアを受けなければならなくなります。

ペットロスを防ぐのに、ペットの最期をどう看取るか、どのようなお別れにしたいか、納得できる形で看取ったかというのは、すごく影響があるようです。

獣医によると、ペットロスを防ぐために最後の別れの儀式、お葬式をきちんとやることは効果的だということです。

《安楽死問題について》

安楽死の是非はともかく、アニマルコミュニケーションを依頼する人の中に、安楽死をさせてよかったのか動物に質問するケースがけっこうあるそうです。これは欧米のクライアントさんのケースです。日本では安楽死での依頼は少ないそうです。

本書でも安楽死を選択した飼い主の話がいくつもあって、すべて、動物はそれで OK だよと言い、家族が自分を手放すところの準備をしてほしいと言っています。

おくだ先生によると、亡くなる前の動物がないたり苦しそうにしている、人間が思うほど苦しんではいないことが多いそうです。

先生の経験では、それでも苦しむ姿を見ていられなくて安楽死を決めた飼い主の動物は、安楽死させる前になにもしなくても亡くなるそうです。動物があきらめて自ら身をひくということ、それは結局、動物と飼い主の絆がそうさせているとのこと。

安楽死は人の生き方の問題、人と動物との関係の表れだと感じます。

欧米に多い、なにより動物のクオリティーオブライフを優先する考え方。犬や馬が走れなくなった、目が見えなくなったなど人の手で介護されなければ生きていけなくなったら、動物がかわいそう。苦しんで生きている、生きていることが楽しくないまま生かすことは、極論すれば罪である。こういう考え方、感じかたの奥にあるものについて、今後も考えていきたいと思います。

《朗読、その前に》

それぞれ動物がテーマをもって語っています。

たとえば、「すべての命に価値があって、短くても長くてもそれは長さでは計れない」とか、

「動物も生まれてくるとき課題も持ってくる」とか、

「肉体は魂の入れ物であり、この世での学びを終えると、向こう側の家に帰る」などなど。

どうぞ、動物が語る死生観の物語の世界に浸ってみてください。



【P.S. 一枚の写真】

池袋旭屋書店で写真家の三木知子さんが撮ってきてくれた写真です。

書棚からがんばってるよ～って声が聞こえそうな、飛び出している3冊。

売れ残っているのではありません！ 発売当初は複数冊並べることはありますが、何年もたったら通常は1冊しか並べません。きつときつと書棚担当の方が気に入ってくれているのだと思います。

書棚から飛び出す本書のサイズは、本が傷むので嫌われることは分かっていたのですが、横長の絵を生かし、両手で持って静かに読んでほしいとこのサイズにしました。

本屋さんで飛び出しているのを見かけたら、そっとエールを送っていただければ幸いです。

